

令和 2 年 7 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K09264

研究課題名(和文) 原発事故被災者の震災関連死・震災関連自殺に対する「社会的ケア」の確立

研究課題名(英文) Establishment of Social Care model of Fukushima Nuclear Disaster Preventing Disaster Relative Death and Suicide

研究代表者

辻内 琢也 (TSUJIUCHI, TAKUYA)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00367088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：2011年3月11日の東日本大震災に派生して福島第一原子力発電所事故が発生した。本研究は、心身医学的な量的調査と医療人類学的な質的調査を通して、原発事故広域避難者のストレスや孤独死・自殺予防のための新たな「社会的ケア」モデルの構築を目指したものである。大規模アンケート調査、被災者・被害者へのインタビュー調査、ハーバード大学との海外連携、民間支援団体と共に企画実践するフィールドワークの4手法を用いた調査研究を継続してきた。PTSD症状を含む高いストレス度には、心理・社会・経済的因子が強く関与しており、社会的ケアには、医師・臨床心理士・社会福祉士・弁護士・司法書士らの協働体制の必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1)福島原発事故の状況を広く社会に伝えるための一般書籍「フクシマの医療人類学 - 原発事故・支援のフィールドワーク」(遠見書房,2019)の刊行、2)国際社会に向けた英文書籍「Human Science of Disaster Reconstruction」(Interbooks,2019)の刊行、3)国際雑誌Japan Forumに原著論文「Post-traumatic Stress Due to Structural Violence after Fukushima Disaster」の掲載、4)原告となった被災者救済と生活再建確保のための裁判所への意見書作成、以上4つの成果があげられた。

研究成果の概要(英文)：This study analyses the socio-psychological impacts on victims of the Fukushima nuclear disaster and establishes the social care model. As the result of the Great East Japan Earthquake on 11 March 2011, the meltdown of the Fukushima Daiichi nuclear power plant occurred with the subsequent distribution of radioactive substances. We performed large scale quantitative questionnaire survey every year after the disaster, also performed interview and fieldwork study. A high level of stress, including signs of Post-Traumatic Stress Disorder (PTSD) was found and it related to the psycho-socio and economic distresses. These collective sufferings are argued to be the result of 'structural violence'. This violence destroyed the living environment and was exacerbated by government policies of return and compensation. Finally, the importance of collaboration between several professionality such as medical doctor, clinical psychologist, social worker, lawyer, and judicial scrivener was evaluated.

研究分野：心身医学・医療人類学

キーワード：ストレス PTSD 原発事故被災者 社会的ケアモデル 自殺予防 多職種連携 構造的暴力 国際情報交換

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

1995年に発生した阪神・淡路大震災において、応募者らは震災1ヶ月後の避難所にてプライマリ・ケア医療活動に従事し、問診カード調査結果を報告した。被災者には高血圧の既往のない者の約45%に高血圧状態が認められ、「不眠・食欲不振・易疲労・頭痛・胸痛・動悸」などのストレス症状が多く、また近親者死亡群に「易疲労」が、建物全壊群に「抑うつ気分・不眠」が多く認められるなど、被災状況が様々な心身相関に基づく諸症状を引き起こすことを多変量解析にて明らかにした[辻内ほか,1996,同論文にて日本心身医学会「石川記念賞」受賞]。同時に応募者らは、震災3-4ヶ月後の被災者に有意に心理的ストレス反応が強く、外傷後ストレス障害(PTSD)発症率は10.9%と推定されることを報告し[坂野ほか,1996]、災害後の様々な症状には身体・心理・社会的ストレスが関与しており、内科学的アプローチに加えて「心身医学的アプローチ」が不可欠であることを指摘した。

2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下3.11)において、福土ら[2012]は宮城県における震災後ストレス外来における速報値として、心身両面におよぶ高い頻度の健康障害を報告しており、また橋詰ら[2012]も、社会経済的要因、転居や仮設住居の使用、日々の生活ストレス、ソーシャルサポートが、震災後の心身の健康状態に影響を与えていると述べている。さらに3.11がもたらした巨大な課題として、地震・津波の被害に加えて福島原子力発電所事故が発生し、放射線被曝と最大16万人を超える住民の広域避難を生みだしたことがあげられる。

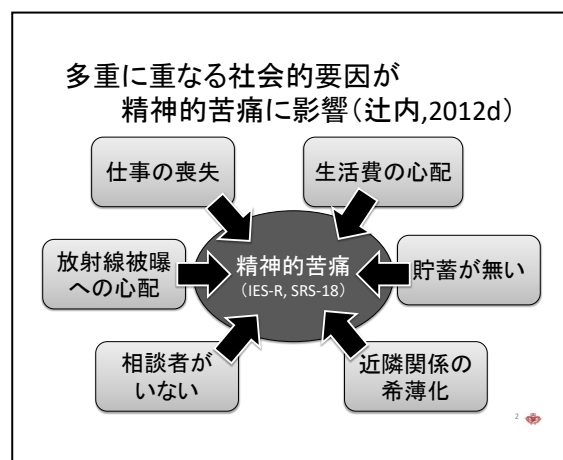
原発事故の影響に関する研究として、簗下[2012]は1999年茨城県東海村JCO臨界事故の特徴として、広範囲・長期性、ホルモンや遺伝子への影響不安、風評被害、情報の錯綜等をあげている。1979年米国スリーマイル島原発事故では、Davidsonら[1986,1991]は事故4年後においても被災住民は対照住民と比べてPTSD症状などの高いストレス水準を示し続けたと報告している。Dewら[1993]も10年の追跡調査にて、低教育、低収入、避難体験、原発施設に対する高い危険意識が、長期にわたって心理的負荷を大きくする要因であることを示している。1986年旧ソ連チェルノブイリ原発事故では、半径30km以内に居住する11万6千人が避難させられ、丸山[2011]は原発事故を“沈黙の災害(silent disaster)”とし、長期かつ広範囲に発展する“見えないトラウマ(invisible trauma)”の発生を警告している。また、阪神淡路大震災後に災害復興期の仮設住宅や災害復興住宅における「孤独死」が注目されてきたが、村上[2006,2007]はbio-psycho-socio-spiritualな全人的苦痛(total pain)が複合的なストレスとなって長期にわたって被災者を苦しめており、全人的ケアとして医療や心理分野の専門家だけでなく、福祉・行政・教育・NPO・メディアなどさまざまな職種によるチームとしてのケアやネットワークづくりが不可欠であると述べている。

このように、様々な社会的要因が健康状態に影響を与えている状況を鑑みると、福島県で急増する震災関連死・関連自殺を予防するためには、bio-psychoレベルをベースにした従来の狭義の心身医学では対処不可能であり、より包括的な「社会的ケア」の確立が必要だと考えるに至った。

### (2) 応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

応募者は「基盤C」「原発事故広域避難者のストレスに対する研究—自殺予防のための社会的ケアモデルの構築」を基盤に、原発事故による埼玉県・東京都への避難者を対象に、民間支援団体「震災支援ネットワーク埼玉(以下SSN)」、福島県双葉町役場、埼玉弁護士会等と協働し、“支援”を前提とした研究を継続させてきた。それは心身医学的な量的調査と医療人類学的な質的調査を組み合わせた研究であり、同時に原発事故被災者の生活再建を支援する包括的なプランの企画と実践である。

[1].調査研究：①避難所調査：さいたまスーパーアリーナ一時避難所利用者1,628名のアンケート調査分析(2011年3月)[辻内ほか,2012a]。②被災自治体調査：福島県双葉町教育委員会によるアンケート調査分析(401世帯)(2011年5月)[辻内ほか,2012b]。③被災体験の「語り」インタビュー調査：15名の壮絶な原発事故避難体験を記録[辻内,2013a]。④大規模アンケート調査：埼玉県・東京都への避難者を対象とした2012年調査(2,011世帯)[辻内ほか,2012cd；増田ほか,2013]、2013年調査(4,268世帯)[辻内,2014a]、2014年調査(3,599世帯)[辻内,2015ac]、そして日本放送協会(NHK)との共同で行なった福島県内仮設住宅居住者を対象とした2013年福島調査(2,425世帯)、2015年岩手・宮城・福島調査(56,114世帯)にて、原発事故後4年を経過してもなお、出来事インパクト尺度(IES-R)平均点が25点、PTSDの可能性のある者が50%を超え、右図のような多重な社会的要因がストレスに有意な影響を与えていることを多変量解析にて明らかにしてきた。



[2]支援/ケアの企画実践：応募者はSSNと協働し、①避難者と共に交流会・コミュニティ・カフェの設立、②心理相談・生活相談・法律相談を兼ねた相談会の開催、③支援者向けのゲートキ

一パー養成講座の定期開催、④心理・福祉・法律・教育連携による電話なんでも相談「よりそいホットライン埼玉」(内閣府委託事業)の埼玉支部の立ち上げ、⑤社会資源リストの作成、⑥被災者支援広報誌「福玉便り」の発行を企画実践してきた。

### **(3) これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容**

2014年3月には福島県の震災関連死者数が直接死者数1,607名を超え、なかでも震災関連自殺者数は54名に達した。このような状況の打開には、従来の「心理的ケア」のみならず、“原発事故特有の状況は何か”“震災・津波被災者と何が違うのか”という視点の上に、雇用の促進、生活費の安定、コミュニティの再構築、ソーシャルサポートの充実、放射線被曝問題への対処といった社会的問題の解決をはかる「社会的ケア」の確立が緊急の課題である。

## **2. 研究の目的**

本研究では、原発事故被災者を対象に、[A]大規模アンケート調査、[B]インタビュー調査、[C]ハーバード大学との連携、[D]ケアの企画実践フィールドワークの4手法を用いて、震災関連死・自殺予防のための新たな「社会的ケア」の確立を目指す。

これまでに応募者らは、埼玉県・東京都を中心とした原発事故被災者を対象に調査研究を続け、極めて高いストレス状況と生活・経済状況の問題を量的・質的に明らかにしてきた。2014年には福島県の震災関連死者数が直接死者数を超え、2016年には集中復興期間が終了し被災者は新たなフェーズに入る。原発事故特有のストレスには従来の「心理的ケア」だけでは対処不可能であり、医療・心理・福祉・法律・教育連携による「社会的ケア」の確立が緊急の課題である。

## **3. 研究の方法**

### **(1) 研究計画A：原発事故被災者に対する大規模アンケート調査**

応募者らが震災後、毎年行なってきた福島県住民を対象にしたアンケート調査を継続させる。震災支援ネットワーク埼玉(SSN)、日本放送協会(NHK)、NPO法人福島県人友の会、福島県災害対策本部、福島各市町村等の協力により、質問紙を福島県および市町村の広報誌類と共に各世帯に郵送配布する。

アンケート項目は下記のように、被災世帯の現状を医療・心理・福祉・法律・教育の観点から総合的に把握しようとするものであり、①今後の支援のあり方の検討、②行政への提言を目的として行う。

[アンケート項目] 被災状況、家族状況、補償・賠償状況、生活・経済状況、住宅状況、就労状況、放射線被曝の影響について、地域とのつながりや情報について、最近のからだの状態について、最近のこころやストレスの状態について(K6、うつ病評価尺度CES-D、改訂版出来事インパクト尺度IES-R)、自由回答・みなさまの声

アンケートの作成は、SSN関係者で、弁護士・司法書士・社会福祉士・臨床心理士・女性相談や労働相談の専門家・元県議会議員・市議会議員らと、早稲田大学医療人類学研究室・老年福祉学研究室・臨床心理アセスメント研究室・社会医学研究室・発達行動学研究室・建築環境心理学研究室との共同で行なってきた。

同様のプロセスを用いて、今後も毎年(平成28・29・30・31年)アンケートを新たに作成し、災害後のステージに応じた心理・社会的ストレスの種類と程度を明らかにし、それに影響を与えている社会経済的要因をマクロの視点から量的・質的に探る。K6、CES-D、IES-R等、アンケートには毎年共通した項目を含め、フォローアップ調査としての意味も兼ねる。

### **(2) 研究計画B：被災者および遺族への「喪失と再生」の語りに学ぶインタビュー調査**

家族・仕事・住宅・コミュニティ・故郷を喪失したことによる全人的苦痛に耳を傾け、そこから再生しようとしている被災者および遺族一人ひとりの「語り(ナラティブ)」の精緻な分析を通して、ミクロの視点から社会的ケアに必要な諸要素を探る。被災者の経験は、苦難といかに向き合い、どのような社会資源とのアクセスによって再生の道を歩みはじめたのかを考えていく上で極めて貴重な“苦しみの教え”[Frank, 1995]と考えられるからである。これまでに震災関連自殺遺族1名のインタビュー調査を行なったが、今後も被災者や遺族を中心に調査を行なう。

方法：①絶望と喪失の体験、②再生にむけた歩み、③幼少期からの人生史、④社会にむけた要望や提言を設定した4項目の半構造化面接を行なう。同一対象者に数年かけて2-3回のフォローアップ・インタビューを行ない、震災関連死および自殺の原因・誘因等も含めた身体・心理・社会的要因を明らかにすると共に、災害後のステージに応じた意味づけの変容も捉える。

### **(3) 研究計画C：Harvard Program in Refugee Trauma (HPRT) との海外連携**

HPRTは「難民トラウマ問題におけるハーバードプログラム」であり、Harvard Medical SchoolとSchool of Public Health、School of Education、Massachusetts General Hospitalにおかれた研究所として、これまでに阪神淡路大震災・カンボジア・クロアチア・ボスニア等々世界各地の災害や紛争による避難民のトラウマに対する調査・支援・ケアを行なってきた。また臨床事例研究、量的・質的調査、疫学、口述人生史、文学などの方法論を融合させ、様々な社会的暴力や拷問の生存者に対する心理・社会的ケアを開発している。スタッフには精神科医、ソーシャルワーカー、コミュニティオーガナイザー、臨床心理士、NGO専門家、疫学者、神経科学者、小児科医、医療人類学者、ジャーナリスト、神学者という異分野が連携するという先駆的な臨床と研究が行われている。

応募者は平成25年度の1年間、HPRTの主任教授であるRichard F. Mollica, MD, MARの元で



Research Fellow として在外研究を行なった。特に HPRT の Eugene F. Augusterfer 氏とは応募者が原発事故被災者に対して行なってきた調査データを共同で分析し海外に発表してきた。今後も引き続き HPRT が世界規模の支援や臨床的ケアに関する専門的知見を元に、グローバルな視点から心理・社会的ケアの方法論を考案する。

#### **(4) 研究計画 D: 民間支援団体と共に「社会的ケア」企画実践するフィールドワーク**

弁護士・司法書士・社会福祉士・臨床心理士・女性相談や労働相談の専門家・学校教育関係者からなる SSN と共に、医療・福祉・心理・法律・教育連携による「社会的ケア」の確立が必要である。これまでに試みてきた、①交流会・コミュニティ・カフェ、②心理相談・生活相談・法律相談を兼ねた相談会、③支援者向けのゲートキーパー養成講座、④心理・福祉・法律・教育連携による電話なんでも相談、⑤社会資源リストの作成、⑥被災者支援広報誌の発行に加え、震災関連死・震災関連自殺予防するためには、原発事故被災者特有の極めて高いストレスを改善する必要がある。従来の「心理的ケア」だけでなく、雇用の促進、生活費の安定、コミュニティの再構築、ソーシャルサポートの充実、放射線被曝問題への対処といった「社会的ケア」のシステムティックな統合を目指す。

### **4. 研究成果**

#### **(1) 和文著書の発行**

■辻内琢也・増田和高(編著)『フクシマの医療人類学—原発事故・支援のフィールドワーク』(遠見書房、2019)

上記の研究計画 A, 大規模調査, B インタビュー調査, C ハーバード大学との連携, D 支援のフィールドワーク、を総まとめした著書を発行することができた。この著書は、医療・心理・福祉関連の専門書であると同時に、原発事故に関心をもつ一般読者を対象にしたものであり、写真や図を多用し、できるかぎり平易な日本語で記述することを心掛けた。特記すべきことは、第1章では、壮絶な原発事故避難体験の質感をどう記述するかという問いに答えることを目的として、新しいスタイルの記述を試みている。インタビュー調査をもとに、被災者の被災体験をノンフィクション・ノベルの形式に再構成した試みである。欧米では、数名の人類学者が始めている新しい学術的記述のスタイルである。この方法により、同じ現場に居合わせた複数の人びとによる「羅生門的現実」を描くことが可能になり、福島地方の言語を使用し、インフォーマント同士の交流を描くこともできる。また、インフォーマントの語りの背後にあった非言語的な感情を内声という形で表現することも可能となり、さらに、人物や場所を仮名にしたノベルとして描くことでインフォーマントのプライバシーの順守にもつながると考えられた。

著書は、第一部：緊急避難フェーズ、第二部：避難生活確立フェーズ、第三部：格差拡大フェーズ、第四部：復興再建フェーズ、という構成になっており、全体を通して「調査や研究をいかに社会に還元するか」という問題に答える姿勢を貫いている。

#### **(2) 英文著書の発行**

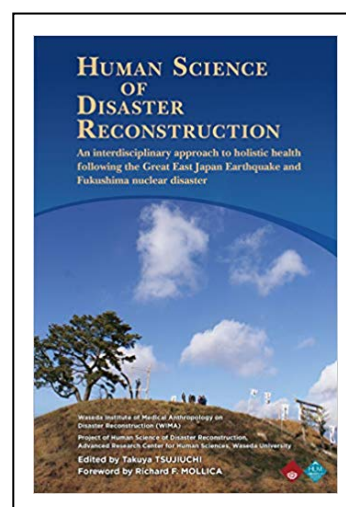
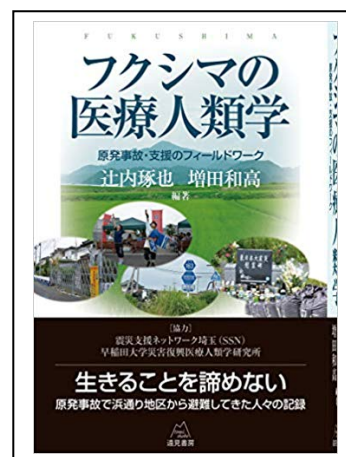
■Takuya TSUJIUCHI(Ed.)『Human Science of Disaster Reconstruction: An interdisciplinary approach to holistic health following the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear disaster』(Interbooks, 2019)

本書は、筆者が 2011 年より共同研究を重ねてきた国内外の研究メンバーに 1 本ずつ論文を寄稿していただいた論文集である。Part I は Field work and supporting actions (フィールドワークと支援活動) として 6 つの論文を、Part II は Research project (研究プロジェクト) として 9 つの論文を掲載している。前文にハーバード大学の Richard F. Mollica 教授に、本研究プロジェクトの意義について紹介していただき、Part II には、Eugene F. Augusterfer 氏の東日本大震災および原発事故に関する海外での研究をレビューしていただいております、研究計画 C に示した HPRT との海外連携の成果と言える。日米 Amazon で販売し、Kindle 版も作成することにより、国際的により多くの読者に提供できる工夫をしている。また、欧米および ASEAN 諸国の著名大学図書館や災害関連政府機関へ計 200 冊寄贈した。

#### **(3) 国際雑誌への英文論文掲載**

■Takuya TSUJIUCHI: Post-traumatic stress due to structural violence after Fukushima Disaster. Japan Forum, DOI: 10.1080/09555803.2018.1552308, 2020

Japan Forum という国際雑誌は、英国における日本研究をテーマにした伝統のある学会誌である。本論文は、原発事故による区域内避難者(強制避難者)と、区域外避難者(自主避難者)と、津波による避難者、の 3 者の質の違いを比較検討している。原発事故避難者は、原発事故によつ



て生活・人生・社会環境・自然環境を根こそぎ奪われることになった。彼らが直面している Social Suffering (社会的苦悩) は、原子力発電を推進してきた日本の戦後の歴史や、経済発展を優先させてきた政策を抜きにして語ることはできず、彼らは「構造的暴力 (structural violence)」による犠牲者とみなすことができると、批判的医療人類学の諸理論をもとに分析した。

#### (4) 日本語学術雑誌、和文著書への論文掲載

業績項目に示した通りであるが、2016 年度～2019 年度には、学会誌原著論文 (日本心身医学会雑誌、社会医学会雑誌、日本災害復興学会論文集) に計 6 本、学会誌総説論文が 3 本、紀要等の学術誌論文 (岩波「科学」、学術の動向、ナラティブとケア) が 3 本掲載された。

また、戸田典樹 (編著) 『フクシマ原発事故一取り残される避難者』 (明石書店、2018)、関谷雄一・高倉浩樹 (編著) 『震災復興の公共人類学』 (東京大学出版会、2019) にも 1 篇ずつ論文が掲載された。

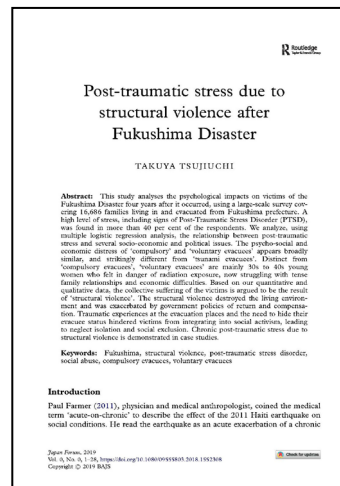
#### (5) 原発事故被害裁判への意見書の提出

これまでに、筆者が所長を務める早稲田大学研究チーム「早稲田大学災害復興医療人類学研究 (WIMA) 2014 年結成」と共同で支援活動を行ってきた、震災支援ネットワーク埼玉 (SSN) / 埼玉弁護士、東京災害支援ネット (とすねっと) / 首都圏弁護団の依頼で、埼玉地方裁判所・東京地方裁判所における原発事故訴訟において、被災者の陥っている甚大な精神的苦痛を、人間科学的観点から実証する調査結果をもとに、意見書を作成した。調査研究の社会的還元のひとつとして、原告となった原発事故被害者の生活再建に多少なりとも貢献できたものと考えられる。

#### (6) テレビ・ラジオ・新聞等のマスコミにおける報道

研究成果が以下のメディア媒体にて報道され、広く社会に知らせることに役立った。

- <NHK 視点・論点> 「心をサポートする体制作り」2016 年 06 月 03 日放映
- <NHK 東北ココから> 「“分断”された故郷で～原発事故 7 年 めざした復興の今～」2018 年 7 月 27 日放映
- <NHK ニュース>
  - ・NHK ニュース (総合) 2017 年 3 月 9 日: 「“原発避難いじめ” 大人も半数近くに」
  - ・NHK ニュース (総合) 2018 年 2 月 24 日: 「福島からの避難者 20% がうつ病疑われる強いストレス」
  - ・NHK World News: 2017 年 3 月 20 日: 「Teenager speaks out about being bullied due to the March 2011 disaster」
- <NHK ラジオ>
  - ・ラジオ第 1 (埼玉) 2018 年 3 月 8 日: 「日刊! さいたま〜ず」 (出演)
  - ・ラジオ第 1 (東京) 2018 年 3 月 11 日: 「東日本大震災から 7 年 取り残された人々」
- <新聞記事>
  - ・朝日新聞/福島 2016 年 10 月 10 日: 「低線量被曝と健康を討論」二本松で市民科学者国際会議
  - ・福島民友 2017 年 2 月 26 日: 福島県避難者、PTSD 上昇 支援打ち切りへ
  - ・日本農業新聞 2017 年 2 月 26 日: 「原発事故被災者ストレスを軽く」孤立防止テーマ東京でシンポ
  - ・東京新聞 2017 年 3 月 9 日: 【社説】 3・11 と原発避難者 支援の幕引きは早い
  - ・埼玉新聞 2017 年 3 月 10 日: 【一面】 ストレス一転「上昇」、支援打ち切り不安増大、福島から避難 (東日本大震災 6 年)
  - ・朝日新聞 2017 年 3 月 11 日: 【社説】 「分断の系譜」を超えて (大震災から 6 年)
  - ・東洋新聞/埼玉 2017 年 3 月 11 日: <揺れる思い 埼玉の避難者> (下) 変わる避難者集会周囲の決断で焦り
  - ・東京新聞 2017 年 3 月 13 日: 【一面】 避難者孤立深める、PTSD の恐れ急増 46%、支援打ち切りで「危機的」に (東日本大震災 6 年)
  - ・Buzz Feed Japan News 2018 年 3 月 11 日: あの日から、笑ったことは一度もない。震災 PTSD のいま
  - ・Buzz Feed Japan News 2018 年 3 月 11 日: 原発避難者の 47% が PTSD リスクを抱えている。その理由とは
  - ・DIAMOND Online 2018 年 3 月 12 日: 「3.11」被災者の PTSD が 7 年目に増えた理由。
  - ・赤旗 2018 年 4 月 26 日: <原発事故 被害者全員の救済を> 避難者 4 割が PTSD か 不合理な帰還区域設定やめよ
  - ・東京新聞/埼玉中央版 2020 年 3 月 11 日: 18% が高ストレス、フクシマから関東への避難者。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Takuya TSUJIUCHI	4. 巻 -
2. 論文標題 Post-traumatic Stress Due to Structural Violence after Fukushima Disaster .	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Forum	6. 最初と最後の頁 1 - 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09555803.2018.1552308	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 岩垣穂大, 辻内琢也	4. 巻 59(4)
2. 論文標題 「人と人」、「人と社会」のつながりが心身の健康に与える影響 .	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 328 - 336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻内琢也	4. 巻 59(4)
2. 論文標題 医療人類学からみたフィールド医学の意義 .	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 337 - 344
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻内琢也	4. 巻 (10)
2. 論文標題 フクシマの医療人類学：構造的暴力による社会的虐待論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ナラティブとケア	6. 最初と最後の頁 35 - 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩垣穂大, 辻内琢也, 扇原 淳	4. 巻 12
2. 論文標題 ソーシャル・キャピタルを活用した災害に強いまちづくり; 福島原子力発電所事故による県外避難者受け入れ経験から.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本災害復興学会論文集	6. 最初と最後の頁 46-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://f-gakkai.net/uploads/ronbun/ronbun12-05.pdf">http://f-gakkai.net/uploads/ronbun/ronbun12-05.pdf</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻内琢也	4. 巻 88(3)
2. 論文標題 原発避難いじめと構造的暴力.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 265-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩垣穂大, 辻内琢也, 小牧久見子, 福田千加子, 持田隆平, 石川則子, 赤野大和, 桂川泰典, 増田和高, 小島隆矢, 根ヶ山光一, 熊野宏昭, 扇原 淳	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 福島原子力発電所事故により自主避難する母親の家族関係及び個人レベルのソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスとの関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会医学研究	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩垣穂大, 辻内琢也, 増田和高, 小牧久見子, 福田千加子, 持田隆平, 石川則子, 赤野大和, 山口摩弥, 猪股 正, 根ヶ山光一, 小島隆矢, 熊野宏昭, 扇原 淳	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 福島原子力発電所事故により県外避難する高齢者の個人レベルのソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスとの関連.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 173-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻内琢也, 村上典子	4. 巻 57(10)
2. 論文標題 パネルディスカッション: 大災害ストレスの心身医学 司会のことば	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 997-998
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩垣穂大, 辻内琢也, 扇原淳	4. 巻 57(10)
2. 論文標題 大災害時におけるソーシャル・キャピタルと精神的健康 - 福島原子力災害の調査・支援実績から - .	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 1013-1019
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻内琢也	4. 巻 22(4)
2. 論文標題 原発災害が被災住民にもたらした精神的影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/22/4/22_4_8/_pdf/-char/ja">https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/22/4/22_4_8/_pdf/-char/ja</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takuya Tsujiuchi, Maya Yamaguchi, Kazutaka Masuda, Marisa Tsuchida, Tadashi Inomata, Hiroaki Kumano, Yasushi Kikuchi, Eugene F. Augusterfer, Richard F. Mollica	4. 巻 11(3)
2. 論文標題 High prevalence of post-traumatic stress symptoms in relation to social factors in affected population one year after the Fukushima nuclear disaster.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 PLoS ONE	6. 最初と最後の頁 e0151807
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0151807	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する



1. 著者名 辻内琢也, 小牧久見子, 岩垣穂大, 増田和高, 山口摩弥, 福田千加子, 石川則子, 持田隆平, 小島隆矢, 根ヶ山光一, 扇原淳, 熊野宏昭	4. 巻 56(7)
2. 論文標題 福島県内仮設住宅居住者にみられる高い心的外傷後ストレス症状 - 原子力発電所事故がもたらした身体・心理・社会的影響 - .	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 723-736
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口摩弥, 辻内琢也, 増田和高, 岩垣穂大, 石川則子, 福田千加子, 平田修三, 猪股正, 根ヶ山光一, 小島隆矢, 扇原淳, 熊野宏昭	4. 巻 56(8)
2. 論文標題 東日本大震災に伴う原発事故による県外避難者のストレス反応に及ぼす社会的要因～縦断的アンケート調査から～ .	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 819-832
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻内琢也	4. 巻 86(3)
2. 論文標題 原発事故がもたらした精神的被害：構造的暴力による社会的虐待 .	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 246-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 辻内琢也, 金智慧, 増田和高
2. 発表標題 壮絶な原発事故体験を聞き取ることの意義：現場の質感を記述する新たな試み .
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 増田和高, 辻内琢也, 金智慧
2. 発表標題 復興と生活者の声～震災経験の意味を考究することは被災者支援にどのようにつながるか?～.
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 賈一凡, 大橋美の里, 金智慧, 岩垣穂大, 増田和高, 辻内優子, 桂川泰典, 小島隆矢, 扇原淳, 根ヶ山光一, 熊野宏昭, 辻内琢也
2. 発表標題 福島原発事故被災者の社会的要因と心的ストレス症状との関連: 2016年調査から
3. 学会等名 第2回 日本心身医学関連学会 合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大橋美の里, 賈一凡, 金智慧, 岩垣穂大, 増田和高, 辻内優子, 桂川泰典, 小島隆矢, 扇原淳, 根ヶ山光一, 熊野宏昭, 辻内琢也
2. 発表標題 原発事故被災者の社会的要因と心的ストレス症状との関連: 2017年調査から
3. 学会等名 第2回 日本心身医学関連学会 合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩垣穂大, 辻内琢也, 扇原淳
2. 発表標題 福島原子力発電事故の県外避難者におけるメンタルヘルスと生活における課題
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩垣穂大, 辻内琢也
2. 発表標題 「人と人」、「人と社会」のつながりが心身の健康に与える影響
3. 学会等名 第59回日本心身医学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻内琢也
2. 発表標題 老いの医療人類学からみたフィールド医学の意義
3. 学会等名 第59回日本心身医学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小牧久見子、持田隆平、岩垣穂大、石川則子、赤野大和、福田千加子、桂川泰典、増田和高、多賀努、小島隆矢、扇原淳、根ヶ山光一、熊野宏昭、辻内琢也
2. 発表標題 福島原発事故により避難指示の指定を受けた被災者の心的外傷後ストレス症状
3. 学会等名 第58回日本心身医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋光咲、辻内琢也、岩垣穂大、増田和高、扇原淳、熊野宏昭
2. 発表標題 東日本大震災4年目の宮城県被災者の外傷後ストレス症状に影響を与える身体・心理・社会的要因.
3. 学会等名 第57回日本心身医学会総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川崎拓真、小牧久見子、岩垣穂大、赤野大和、高橋光咲、福田千加子、増田和高、扇原淳、熊野宏昭、辻内琢也
2. 発表標題 東日本大震災4年目の岩手県被災者の外傷後ストレス症状に影響をあたえる身体・心理・社会的要因。
3. 学会等名 第57回日本心身医学会総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小牧久見子、岩垣穂大、赤野大和、川崎拓真、高橋光咲、福田千加子、増田和高、扇原淳、熊野宏昭、辻内琢也
2. 発表標題 原子力発電所事故4年後の被災者の放射線・放射能のイメージとストレス度との関連。
3. 学会等名 第57回日本心身医学会総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岩垣穂大、辻内琢也、扇原淳
2. 発表標題 大災害時におけるソーシャル・キャピタルと精神的健康：福島原子力災害の調査・支援実績から。
3. 学会等名 第57回日本心身医学会総会、シンポジウム「大災害ストレスの心身医学」（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小牧久見子、持田隆平、岩垣穂大、石川則子、赤野大和、福田千加子、桂川泰典、増田和高、多賀努、小島隆矢、扇原淳、根ヶ山光一、熊野宏昭、辻内琢也
2. 発表標題 東日本大震災が生み出した自主的避難者における心的外傷後ストレス症状。
3. 学会等名 第21回日本心療内科学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 辻内琢也, 滝澤柚, 岩垣穂大, 佐藤純俊 (著) 関谷雄一, 高倉浩樹 (編著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 297
3. 書名 震災復興の公共人類学: 福島原発事故被災者と津波被災者との協働	

1. 著者名 辻内琢也・増田和高 (編著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 330
3. 書名 フクシマの医療人類学 - 原発事故・支援のフィールドワーク	

1. 著者名 Takuya TSUJIUCHI (Ed. )	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Interbooks	5. 総ページ数 245
3. 書名 Human Science of Disaster Reconstruction : An interdisciplinary approach to holistic health following the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear disaster	

1. 著者名 辻内琢也 (監訳責任), 牛山美穂, 鈴木勝己, 濱雄亮 (監訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 497
3. 書名 ヘルマン医療人類学: 文化・健康・病い	



1. 著者名 辻内琢也(著)、戸田典樹(編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 福島原発事故 取り残される避難者：直面する生活問題の現状とこれからの支援課題	

1. 著者名 辻内琢也(著)本堂 毅、平田 光司、尾内 隆之、中島 貴子(編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 信山社	5. 総ページ数 520
3. 書名 科学の不定性と社会：現代の科学リテラシー	

1. 著者名 辻内琢也(著)、戸田典樹(編著)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 202
3. 書名 福島原発事故 漂流する自主避難者たち：実態調査からみた課題と社会的支援のあり方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>早稲田大学災害復興医療人類学研究所  <a href="http://web.waseda.jp/prj-wima/">http://web.waseda.jp/prj-wima/</a>  早稲田大学災害復興医療人類学研究所  <a href="http://www.waseda.jp/prj-wima/">http://www.waseda.jp/prj-wima/</a>  早稲田大学辻内研究室・辻内ゼミブログ  <a href="http://blog.livedoor.jp/tsujiuchi_lab/">http://blog.livedoor.jp/tsujiuchi_lab/</a>  早稲田大学災害復興医療人類学研究所  <a href="http://www.waseda.jp/prj-wima/">http://www.waseda.jp/prj-wima/</a>  早稲田大学辻内ゼミ・研究室ブログ  <a href="http://blog.livedoor.jp/tsujiuchi_lab/">http://blog.livedoor.jp/tsujiuchi_lab/</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----